



2006年4月発足時には66歳だった平均年齢が、5年経った今年72歳になった「さいたまゴールド・シアター」。当初は年齢のことばかりが話題になりがちだったが、いまや演劇界に唯一無二の存在ばかりか、重ねてきた舞台の数々が年を追うごとに注目を集め、評判が評判を呼び、目の離せない劇団となった。「見よ、この自信に満ちた顔、顔、顔」。最新作「ルート99」のチラシ用撮影で訪れた緑豊かな東京・夢の島公園もゴールドのメンバーの多彩な表情に圧倒されていた。

## INDEX

### TALK

蜷川幸雄公開対談シリーズ NINAGAWA 千の目 第23回  
野田秀樹×蜷川幸雄 03

### PLAY

さいたまゴールド・シアター第5回公演『ルート99』  
作家・松井今朝子さんが語るゴールドの魅力 06

### PLAY

さいたまネクスト・シアター第3回公演『2012年・蒼白の少年少女たちによる「ハムレット」』  
蜷川幸雄 インタビュー 08

### SPECIAL

『ピーター・ブルックの魔笛』  
初演リポート(ブッフ・デュ・ノール劇場／パリ) 10

### PLAY

彩の国シェイクスピア・シリーズ第25弾『シンベリン』 13

### DANCE

コンドルズ 埼玉公演2012新作『十二年の怒れる男』 14

### MUSIC

年末年始の注目クラシック  
バッハ・コレギウム・ジャパン ヘンデル《メサイア》  
埼玉会館ニューイヤー・コンサート2012 16

### MUSIC

シリーズ「バッハとの対話」  
Vol.3 & Vol.4 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ全曲演奏会  
寺神戸 亮 インタビュー 18

### OTHER

この冬、さいたまで味わう伝統芸能  
『新春狂言 万作・萬斎の世界』  
『埼玉伝統芸能フェスティバル ～埼玉の里神楽～』  
『邦楽ガラ・コンサート』 20

### CINEMA

2011.12 - 2012.1 彩の国シネマスタジオ  
2012.1 第7回 DMJ 国際ダンス映画祭 22

### REVIEW

2011.9 - 10 彩の国のアーツ 23

EVENT CALENDAR & TICKET INFORMATION 24  
THEATER BRIDGE 27

表紙:さいたまゴールド・シアター第5回公演『ルート99』 裏表紙:さいたまゴールド・シアター photo:宮川舞子 ほか 編集:(公財)埼玉県芸術文化振興財団、佐藤 優 デザイン:Yellownotes inc.  
© (公財)埼玉県芸術文化振興財団 Published on 15. November - December 2011 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation  
※掲載情報は、2011年10月20日現在のものです。公演は追加および一部変更される場合がありますので、ご了承ください。

# 野田 秀樹

劇作家・演出家・役者

公開対談シリーズ第23回  
NINAGAWA 千の目



# 蜷川 幸雄

演出家・彩の国さいたま芸術劇場芸術監督



去る9月17日、ついにこの顔合わせが実現した。

1999年に、野田さんの新作書き下ろし『パンドラの鐘』を、野田版・蜷川版の2つのバージョンで上演して演劇界を大いに盛り上げた2人は、演劇界のトップを走る同志でありライバル。

気心も知れた2人の和やかな雰囲気から繰り出されるのは、ともに公共劇場の芸術監督という肩書きを持ち、世界照準で作品を発表し続けるこの2人だからこそ聞ける貴重な話ばかり。

言われた悪口は  
ずっと覚えている

蜷川(以降N) 野田さんです。(拍手)緊張する？

野田(以降H) 役者として舞台に立つときは大丈夫ですが、これは素というんですか、そうになってしまうとだめです。特に1人でしゃべるのが。講演の依頼とかはないですか。

N 僕は基本的にやらない。

H どうしても断れない講演ってないです

か。すごくお世話になり続けている人からとか。

N この間、ある授賞式で話してくれと言われたけど、前に僕のことをばかにした批評家がいるというので、そいつがいるので嫌だといって行かなかった(笑)。

H 悪口言われたのは何年ぐらい前？

N 15年ぐらい前ですね(笑)。

H 覚えていますね、15年(笑)。でも、やっぱり悪口を言われたことはすごく覚えてますね。僕が20代で岸田戯曲賞に落選した

とき、「演劇の王道が守られた」と言われた。それを言った人のことは覚えているね(笑)。  
N 高邁な理念で動く仕事もあるけれど、僕の場合、あいつの鼻をあかしてやりたいとか、外国の批評で星の数が少なかったことへの怒りとかが原動力になることが多い。決して美しくない。

H 僕は最初の作品が星1つです。ロンドン演劇界でも珍しいらしいです。1つというのは、まずない。相当悪意があったと思うね。あのときは、一からコソコツやろうと思っ





## 自分たちの手の届く範囲のものばかりを観るようになると、そこに小さな世界ができてしまう(野田)

で始めたのに、ものすごいものを見せるみたいにとらえられてしまったのかな。

**N** 僕は野田さんを推薦した文を書いたために、「蜷川幸雄が推薦したにもかかわらず」という劇評があったのではないですか(笑)。

**H** そうです。でも、あの星制というのはどうでもいいと思うけれど、劇評家にとってはいいかもね。あの形は、はっきりおもしろいおもしろくないを表現しなくてはいいですから。

**N** 野田さんは『南へ』の評判がよくて、次の仕事はもう書いているんですか。

**H** 今書いてなくてはいけない時期です(笑)。

**N** 公演はいつなの。

**H** それは新作なので来年の9月です。東京芸術劇場がリニューアルオープンする最初の公演です。その間に『THE BEE(ザ・ビー)』という芝居で海外を回って、あと日本国内も5か所を回ろうと思っているので、その間は執筆できないですから、今のうちに書いておかないと。

**N** 外国では、作・演出・出演ってあまりないでしょう。

**H** それもロンドンでいじめられた理由。そんなことが人間にできるわけがないみたい。ただ、歌舞伎のときは作・演出だけです。歌舞伎は自分にとって違う世界という意識がはっきりあるので、そこに誘導してくれるというか、橋になってくれる役者がいることで成立している。勘三郎が歌舞伎という文化の翻訳者として間に入ってくれたことがすごく大きいです。ロンドンで星1つから始めたときも、キャサリン・ハンターという女優と出会って、彼女が文化的な翻訳というか、イギリスはこういうものなのか、日本人はこう考えとか、間に入ってくれたことでロンドンに入れたなと思います。

**N** 女性でありながらリア王をやっている恐ろしく天才的な女優ですが、一緒に仕事をするのは大変ですか？

**H** ウマが合うのか、全く大丈夫ですね。彼女のつくり方は、日本の役者さんでは見たことのないつくり方で、あれがイギリスの演劇教育のエリートやり方の1つなのかも。稽古場に最初に来て、ずっと自分の心理を言葉にしている、それがずっと続き

ます。だから時々、心理稽古というか、相手がしゃべっているときでもいいから、自分が今何を考えているのかを、全員でばばっと言う稽古をやっていました。

**N** それはおもしろいかもね。

**H** 『ザ・ダイバー』という芝居をやったとき、彼女は少し気が狂った役でしたが、芝居が始まる前にトイレから「ばかじゃないの」とか声が聞こえてくる。気味の悪い劇場だなと思ったら、キャサリンだった(笑)。出番ぎりぎりまでトイレにいて、その中で気が狂っている。

**N** イギリスは、先ほどの心理的なことも含めて、スタニスラフスキー・システムが徹底している気がしますね。

### 若い人にみられるナルシズムの世界

**N** 野田さんは日本の若者の芝居も観ているでしょう。

**H** すごく観ているとはいえないかな。

**N** ある種の世界性というレベルで考えて特徴はありますか。

**H** その話を僕に振りますか(笑)。

**N** いいじゃない。何を言ってもいいから。

**H** 役者としての技術をどう考えるかと。僕もアマチュアから始まっていて、技術なんか要らないというしゃべりから入っています。でも、スタニスラフスキー教育を受けている役者たちを見ていると、技術とは違うけれど、絵でいえばデッサンができない画家はいないわけで、そういうものが日本の場合、基本的にできていないのでは感じつつあります。そして、蜷川さんたちの若い頃は西洋の演劇をまねた新劇というものがある、普通の芝居という言葉があるとしたら、その頃の演技の対象は舞台上の新劇の演技です。でも、今の若い人たちが普通の芝居というときは、テレビドラマや映画の役者の佇まいといいますか、そこが根本的に変わった。なぜ大きな声を出さないといけいないのかという考え方だと思う。

いけれど、ただそこに一切批評性は入らず、友達のものだけを見るというのも、恐らく自分の世界ですよね。だから、自分の世界だけでうまく渡り歩けばということなのかなと。それに影響を与えたものというのは、やっぱりモニターというもの。あるいはビデオの発達とかもあるけれど、常に自分の像を見られる。我々のころはモニターに自分が映ることは絶対になかった。もっと前のモニターもない時代は、人は鏡とか水面にしか自分の姿を見つけることはできなかったのに、今はどれだけ自分の姿を見るかと。そうするとどうしたって我々とは違う自己形成、自己像になります。そういう影響もあるだろうなと。一概にそれがいいか悪いかかわからないわけで、人間というのは今ある文明と一緒に生きるしかないのだからと、そんなことも感じます。だから、性格的な問題ではないですね。それが

を役者に浴びせていたかもなと思って、ちょっと笑えました。

**N** 昔はやっていた？

**H** だって蜷川さんたちがやれてって言うていたから。

**N** そんなことはないよ(笑)。この前、『身毒丸』をやっていて、あまりにも無表情なので、「おまえな、黙っているとわからないんだよ。うなずくならうなずけ。おまえを愛しているやつじゃないと、おまえの内面なんか見やしないぞ、このやろう!」と(笑)。

**H** そうだね。本当にそう言いたくなりますよ。

**N** これで終わりというものあれですが、いいかな。

**H** いいじゃないですか。

**N** 皆さん、どうもありがとうございました。

**H** ありがとうございます。



## アスパラガスのような若者たちに、他人も共有できるような必然性があるのか探りたい(蜷川)

でも、蜷川さんや僕もどちらかというと上寄りの世代なので、舞台上でいつでも大声が出せることは役者にとって当たり前のことで、そういうこと自体が違うと思います。

あと僕はばかばかしいものが好きで、それでいえば日本の若い人がつくっているものはおもしろと思う。ただ、演劇はそれだけではないから、そこを要求しない観客や演出家にとっては、魅力がないものが多いかもしれない。

**N** 大学で授業をやっていて、「君たちはどういう芝居を観るの?」と聞くと、友達がつくった芝居を観に行くと。先行する世代の芝居なんかはほとんど観に行かないわけです。Twitter仲間とかそういう友人を当てにして、何か小さなサークルをつくっているという感じがします。

**H** 自分たちの手の届く範囲のものばかりを観るようになると、そこに小さな世界ができてしまう。今、演劇だけではなくて、若い人の中に起きているある現象というのはちょっとナルシズムの世界で、自分がどう見えているかとか。もちろん役者という仕事はそこ関係しているのは間違いな

当たり前になっている気がする。恐らく普通の芝居をテレビなんかで見た芝居だと思っているのも、確かにそれしか見てないから、ということです。

**N** ここには「さいたまネクスト・シアター」という若者の集団がありますが、10代、20代はじめのすごく若い世代を新メンバーにいられた。言ってみれば、何を考えているのかわからない無表情な世代です。「返事をしろよ」と言わないと返事をしないアスパラガスのような若者たちが、演劇の仕事の中で一体何が露呈されて、彼らに他人も共有できるような必然性があるのかということを探りたくて、一緒に仕事をしています。少し揺らぎ始める人、全然揺らがないで同じままの人が依然としている。おもしろいですよ。

**H** 実はこの前、多摩美術大学で僕の『半神』という芝居をやっていて、後半の10日間ぐらい稽古場に顔を出したの。無表情な若者とかが一瞬懸命やっていたけれど、そのうち何か20代のときのように腹が立ってきて、久しぶりに声を荒げましたね。でも、昔はそういう荒げた罵声



野田秀樹 Hideki Noda

1955年 長崎県生まれ。劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。東京大学在学中に劇団「夢の遊眠社」を結成。92年、劇団解散後、ロンドンに留学。帰国後の93年に「NODA・MAP」を設立。以後、『キル』『パンドラの鐘』『オイル』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『南へ』などの話題作を発表。中村勘三郎丈と組み、歌舞伎「野田版 研辰の討たれ」などの脚本・演出も手掛ける。演劇界の旗手として国内外を問わず、精力的な活動を展開。2009年名誉大英勳章 OBE受勲。2009年度朝日賞受賞。2011年紫綬褒章受章。2012年1月～6月『THE BEE』WORLD & JAPAN TOUR公演予定。